源氏物語の色
「秋の帖」を聴講して

京都城南宮で文化講座が開かれ聴講しました。講師は有名な染織史家吉岡幸雄先生でした。

源氏物語に出てくる平安時代の衣装の色についてのお話でした。

源氏物語の「野分」の帖で『童女おろさせたまひて、虫の籠どもに露飼はせたまふなりけり。紫苑、撫子、濃き淡きあこめどもに、女郎花のかざみなどやうの、時にあいたるさまにて』(わらわべを庭にお下ろしになって、虫の籠に露を与えさせていられるのであった。色々の花の色の濃いのや薄いのがときにふさわしい衣装で)とあるのを、その「ときにあいたるさま」というのが平安時代の衣装の色の最も大切なところで、その他の場面でも、紫式部は衣装の色の組み合わせにその人の趣味や教養、人柄が現れると再三書いています。

桜の季節には赤、薄い赤、桃色、薄い桃色、白というように重ねる、秋には紅葉の盛りの色から紅葉して枯れてゆく茶色、黄色と重ねる。季節感を非常に重んじ、季節を先取りして身に着けるのをよしとし、時期はずれ、季節遅れは、軽蔑されたということです。

会場には染められた色とりどりの布や、その材料、蘇芳、紅花、などとそれによって染められた糸が展示されていました。

F.M

オーストラリア家族旅行①

私達の家族旅行はまず美しい海で泳ぐ事が出来て、景色がよくて、子どもが参加出来て、程々に自主的な計画が組めて、出来る事なら世界遺産が含まれてと欲深い。今年の計画も娘夫婦に任せていたが、結果として百点満点。

オージーアニマルとの触れ合い

オージーとは「Aussie」と書き、オーストラリアに親しみをこめた呼び方で、滞在中、「オージー・」と呼びかけたくなるのは人間もさることながら、なんと言っても動物である。市内で食事をしていても市民プールでも海辺でも近くを鳥が平気で歩いているのである。早速オージーアニマルに触れ合う為、バスで30分の自然の地形の中、百二十種千二百頭以上いると云う〝トロピカルズー〟に行った。上手に飼育されたカンガルー・ワラビー・コアラ・ウォンバット・クロコダイル・にしき蛇などショーの後大抵触れる事が出来る。淡水・海水の2～3mもあるクロコダイルが40～50匹池に動きも無く横たわっているが、飼育員の素手で与える生肉に跳びかかる様は凄まじい。鳥のケージに入ると高らかに人間の笑い声を発している。ふり返るとワライカワセミが案内板に乗って笑っている。オーストラリア特有の動物の中でもアボリジニと生活を共にしてきた〝ディンゴ〟が絶滅危惧種になっている。日本でも見る犬だが、古代アジアから連れて来られて、アボリジニと自由に共生し、〝ワンワン〟と吠えなくてもいい習性になったという。アボリジニも定住し、現代社会ではディンゴの生きて行く世界がなくなってきたのか、柵に囲われている様子に哀れを感じる。反対にカンガルーは子連れ、袋の中、妊娠中と三役できるので増え過ぎて困っているらしい。

ケアンズ・キュランダ鉄道の旅

ケアンズの郊外の鉄道駅から出るキュランダ鉄道。緑豊かな大自然を楽しみ、レトロな雰囲気を満喫させてくれた列車は海抜三八〇mの頂上駅に着く。まず〝オーストラリアンバタフライ・サンクチュアリ〟を訪れる。広い温室内に千五百匹以上の地元に棲息する蝶が飛び交う。鮮やかな青い翅のユリシス（オオルリアゲハ）や豪州最大のケアンズ・バードウィングには眼を見張る。まるで熱帯雨林の中にいるような雰囲気のレストランで、コアラと大トカゲをみながら、ランチをゆっくり戴く。地元工芸品やアボリジニアートでショッピングにいくら時間があっても足りない。アート村やアボリジニダンスショー・バードワールドなどまだまだ楽しめるが、下山時間がせまって至極残念。

帰りは6人乗りのゴンドラのスカイレールで全長7.5キロを約50分かけて下山する。眼下に広がる熱帯雨林は地球最古で、1億二千年前にはオーストラリア全体を覆っていた巨大な森林の一部だ。この真下の森や川に先ほど見た美しい蝶や鳥やクロコダイルや蛇などがいるのだろうかと思うと、途中の乗り換え駅で下車したかったが時間がなく諦めた。

S・U

♡可愛いポシェット♡

教えて下さる先生は各々違いますが一針一針縫う作業は一緒で、人生を語りつつ楽しんでいる所です。

写真の作品を孫達（女の子3人）が来る時、女の子らしい色彩のを作ってあげているので提げて遊びに来るととてもかわいらしいですよ。M・N